



ガラスの壁があるせいで、木の葉に触れることができない。



「今日はもうこんなに水が貯まっている。大きめの傘を持っていこう。」

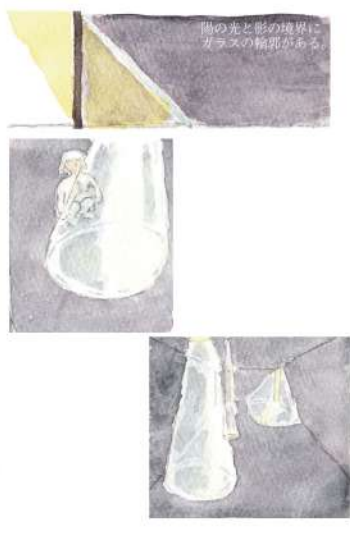


雫の形のガラスには雨水が貯まり、雨量を直接知ることができる。

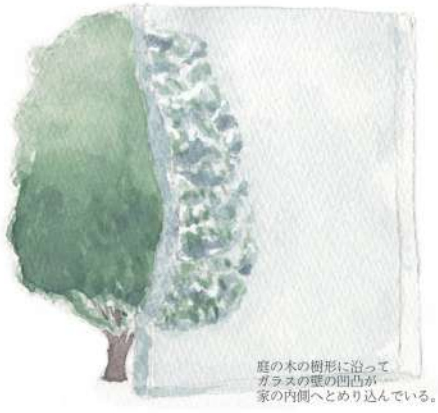
ポタポタとゆっくり落ちる



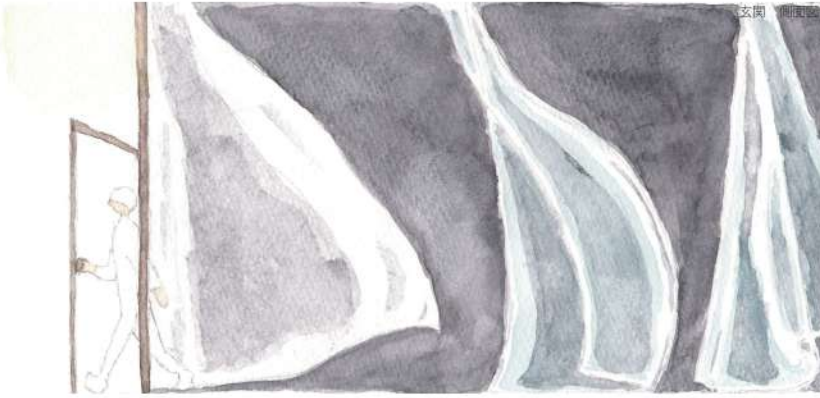
この家では日向ぼっこもガラス越し



闇の光と影の境界にガラスの輪郭がある。



庭の木の樹形に沿ってガラスの壁の凹凸が家の内側へとり込んである。



レースのカーテン風が吹けばなびく、本物の風を目に見ることが出来る。

ガラスのカーテン風の流れを併せ込めたがのように形を変えて止まってきたまま。

玄関 平面図

玄関 側面図

玄関のドアを開けるまでは、無風の空間にガラスのカーテンが風を閉じ込めた、「家の中」を歩く。ドアを開けたとき、人はレースのカーテンとともに外の風を受け、「外」に連れ入れられる。



玄関内からも見える

触れられない「外」はガラスの輪郭



「外」の代わりに存在が手近にあることで外と直接触れ合えることが減っていく。すぐそこにあるのに、ガラスの壁があるから触れられないもどかしさ「外へ出たい」という気持ち

変形自在で透明なガラスの家は、外にあるものを家の中へ入れ手近に置くような造形。しかし同時に、硬いガラスの輪郭はその「外」そのものに触れることを妨げる。

すぐそこに見えるのに触れられないもどかしさを感じたとき、外へ出かけたくなるのだと思った。

家を出て本物の「外」と触れ合いませんか。

外の世界との触れ合いが新たな形で始まる未来の、きっかけの家。

液晶に触る大自然を親で地球を学ぶ。
香水の香りを身に纏い、季節関係なく花の香りを楽しむ。
窓の外の雲行きを見るよりも、天気予報で先の天気を知る。
太陽の位置ではなく時計を見て時間の流れを知る。
生きている花ではなく、手入れも兼ねて枯れない造花を飾る。
普段はなかなか行けないから、海音をスマートフォンから流して聴く。.....

家の外に出なくとも生活ができてしまう社会。本来外にあるもの・外で行うものすらも手近で済ませられるようになっていく社会。コロナ禍でのリモートワークをはじめとする生活様式の変化が、この流れを加速させた。未来でもさらに加速していくのだろう。

便利なものが開発されていく一方、失っていく感覚があることを私は悲しく思う。大袈裟に言えば「外」の代わりに」のおかげで、外に行かずともある程度満足できているだけなのである。(もちろん便利さは良い側面を多く持っているが。)そこで私は、「外」の代わりに」を手近に置くのではなく、「外そのもの」をガラスの輪郭で覆い家の中へ入れ込むデザインを提案する。